

サーキット・ライダー 2003年10月号

招かれていても…

イエスは、また、例えを用いて語られた。「天の国は、ある王が応じのために、婚宴を催したのに似ている。王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。そこでまた、次のように言って、別の家来を使いに出した。「招いておいた人々にこう言いなさい。「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください。」」しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまった。そこで、王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。そして、家来たちに言った。「「婚宴の用意はできているが、招いておいた人々はふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れてきなさい。」」そこで家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった。王が客を見ようと入ってくると、婚礼の礼服を着ていない者が一人いた。王は、「友よ、どうして礼服を着ないでここに入ってきたのか」と言った。この者が黙っていると、王は側近の者たちに言った。「この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ざしりをするだろう。」」招かれる人は多いが、選ばれる人はすくない。」マタイ 22：1－14。

先日、パークリッジ合同メソジスト教会の94周年記念礼拝に日本語ミニストリーも参加し有意義な時を持たせていただきました。まだ車が発達していない時代、一日に数本しかない電車に乗って他の町のメソジスト教会に通っていた熱心なメソジスト数家族がパークリッジにいました。教会の帰り、彼らは時に電車に間に合わず、片道2時間の道のりを歩いて帰りました。今と違い舗装道路のない時代です。その都度、彼らは「自分達の小さな町にメソジスト教会があれば、どんなに良いだろう！」とつぶやいていました。その思いが神の耳に届き、メソジスト教団の巡回伝道師（サーキット・ライダー）が呼ばれ、近隣の牧師達が協力し、1909年9月12日にパークリッジで初めてメソジストの礼拝が持たれました。創設会員16人でのスタートでした。今日、会員100名（礼拝出席40～50人）、さらにインド人の会衆30人が独自の礼拝をし、日本人の小さな群れも礼拝を持つほどに祝福される教会となりました。教会は数人の信仰の実りと言えます。

さてその記念礼拝後、日本語ミニストリーの方々が持ち寄った和風カレー、シチュー、混ぜ寿司などで昼食会を持ち、アメリカ人会衆、インド人会衆と日本人会衆とで楽しい交わりとなりました。白人はどうやらホワイト・クリーム・シチューの方が好みようでしたが、インド人は「ジャパニーズ・カレーは美味しい」と御代りをしていました。「主にある交わりは斯くあらん」と思い喜びを新たにしました。と同時に、上述のイエスの譬え話を思い出しました。

「いったい招かれ、救われるのは誰だろう？」この問いに答えられるのは勿論、神のみです。やたら救いを振り回す人々がいますが、誰が救われ、誰が裁かれるかは、神の見業です。私たちはただ神の御心を信じて、「然り、然り」「否、否」と言うのみ（マタイ 5：37.）で人を裁いてはなりません（マタイ 7：1－6.）。

が、教職にいますと、この「救われる者は誰か？」という問い掛けは繰り返してやってきます。多くの方が言い分けをしては神の招きを台無しにしているような気がして残念でなりません。パーティーや特別な集いに招く側からすると、この素晴らしい時をあなたと分かち合いたい、喜びを伝えたいと思っているのですが、招かれても辞退する側は「自分の思い」がまず先にあり、相手の配慮、思いを汲むには至っていないのではと思います。イエスの譬えでも、人々は王子の婚宴という特別の会よりも、いつもやっている仕事や金儲けを優先しています。先日の記念礼拝の折も「この充実した楽しい時をあの方とも、この方とも分かち合いたい、分かち合えたら良いのに」と思いました。相手にその思いが通じなくても続けていくのが伝道なのだ…と諦めとも覚悟ともつかない思いを新たにもした時でもありました。

吉松 純